



Gifu Symphony Orchestra

公益社団法人 岐阜県交響楽団

〒501-3133 岐阜市芥見南山3丁目7の10  
TEL(058)244-0150 FAX 244-0151  
ホームページ <http://gikyo.ktrroad.jp/>

## 岐阜の宝

公益社団法人岐阜県交響楽団  
副理事長(運営委員長)

辻 正



矢橋理事長が素晴らしい船出をされました。十月十七日の理事会では名古屋の七十年記念演奏会について感謝のご報告をされました。いい船出でした。岡本さんも名譽理事長に就任され本当に有難いことでした。

私は岡本さんに大変お世話になり心から感謝しております。私の学生時代は中国でございました。父親の仕事の関係でした。日露戦争の跡地旅順市でした。父は戦争のためひどい最後でした。その遺骨を首にさげ岐阜に帰りまして苦勞の道が始まり

ました。岡本さんとは青年会議所でお目にかかり今日まで本当に何かとご指導いただき心から感謝しております。岐阜県交響楽団とのご縁はその頃からでございます。サントリーホールのこと、ウィーンのこと、また、謡曲についてはバリ日本会館での発表会など岡本さんの国際感覚から生れたことで嬉しかったです。

矢橋新理事長は著名な方で存じておりましたが電話をいただき「岐阜の方々に挨拶がしたい」から一緒に行くうとご連絡がありました。三日間ご一緒しました。さすが矢橋理事長です。先々で話はずみでした。この度のパトナタツチも鮮やかでした。私は末席でございますが心から感謝申し上げます。私も九十五才となり皆様

にはお世話になるばかりでございますがお許しがあれば役員を続けたいと思っております。私の会社の社歌は楽団の皆様によって出来ました。行事の度に社員一同合唱をしております。

岐阜県交響楽団は公益団体であり県からも市からもご援助をいただいております。国民文化祭ではどの様な貢献ができるか楽しみます。事務局の皆さんもベテランばかりで何の心配もありません。練習場も日本一と言われております。嬉しいことです。

さて、折角紙面をいただきましたので思い出すことを少々。

いつも思うことですが楽団チームの皆さんのご協力がいかに大きいのです。私も二、三分タクトを振らせていただいたことがあります。

その時の写真を大切にしております。また、ある時は団員の皆さんお一人お一人か

ら手紙をいただいたことがあります。家内から「あなたみたいな幸せな人はありませんよ」と言われたことも忘れません。また、サントリーホール演奏のときは、知事さんもご出席になり涙を流しておられました。感動しましたね。ウィーン演奏のときは、事務局長さんがバイオリンを片手に一緒に演奏された「ここでやれば死んでいい」と言われました。ああ、音楽家にとっては最高のことかと感銘しました。また、地方演奏のとき、少し遅れて参りましたら警備員さんに止められ入場出来ませんでした。ああ、うちの楽団は大切にしていただいているんだと嬉しいことでした。思い出は尽きません。どうか皆さん岡本名譽理事長、矢橋理事長のご貢献に心から感謝いたします。ありがとうございます。

株式会社インフォアーム

(相談役)

# 岐阜県交響楽団 第100回記念定期演奏会に寄せて

高谷 光信

私が岐阜県交響楽団と初めて共演したのは、今から16年前の2007年に第71回定期演奏会において「ヴォルゲーク」の交響曲第9番「新世界より」を指揮した時です。その時からこれまで、岐響の皆様とは13回もの共演を重ねてきました。

初めて岐響の皆様と出会った時、私が強く感じたのは「温かさ」です。当時、まだ指揮者としては若手の駆け出しであった私を、岐響の皆様は温かく迎えてくださいました。そして、音楽を奏でる上で最も大切な信頼を育むことで、素晴らしい「新世界より」を演奏することができたのです。この岐響との出会いは、私自身の指揮者としてのキャリアにも大きな影響を与えており、これまで様々な経験をさせていただきました。

演奏会には毎回趣向が凝らされ、岐阜の音楽文化の向上に大きく貢献されていると感じます。郷土にゆかりのある音楽家との共演や、岐阜を題材とした作品の演奏、音楽以外の分野とのコラボレーションなど、地域の皆様がワクワクするような演奏会をいつもお届けしています。私も、これまで岐響の演奏会において、多くの素晴らしいソリストとの共演の機会をいただきました。また、2019年のファミリーコンサートでは、服飾デザイナーの杉沢和子さんによるオートクチュールとのコラボレーションを体験させていただきました。オーケストラ演奏と美しい独創的なドレスによる華やかなステージは、今でも心に残っております。歴史を重ねたオーケストラとして、クラシック音楽の伝統を重んじながらも、新しい試みにチャレンジし続け

る岐阜県交響楽団は、オーケストラという枠を越えた地域の文化の源であると思います。

私と岐響との歴史において、最も印象深い演奏があります。

それは、ウクライナ人のピアニスト、ドミトリー・オニシチェンコによる「ラフマニノフ/ピアノ協奏曲第2番」を演奏した時のことです。

私は、ウクライナのチャイコフスキー記念音楽院（元キーウ音楽院）の指揮科を卒業し、これまで23年間

ウクライナのチェルニーヒウフィルハーモニー交響楽団の常任指揮者を務めて

おります。そのことから、ドミトリー・オニシチェンコとはウクライナで出会いました。

彼は、ウクライナ人の両親のもとリヴィウに生まれ、ロシアのチャイコフスキー・モスクワ州芸術学院で学び、様々な賞を受賞している国際的なピアニストです。

オニシチェンコとは

何度も共演してきましたが、彼の奏でるラフマニノフやチャイコフスキーは、まさにスラヴ音楽を体現する演奏です。広い大地を思わせる壮大な音楽作り、奏でるメロディーには人生への喜びや自由への希求が込められています。オニシチェンコと岐響によるラフマニノフのピアノ協奏曲第2番は、本当に素晴らしい演奏となりました。ウクライナと日本、そして岐阜が確かに絆を結んだ瞬間であったと私は感じたのです。

しかし、皆様もご存知の通り、今



▲第86回定期演奏会、ラフマニノフピアノ協奏曲第2番を演奏後の高谷先生とオニシチェンコ氏。

ウクライナはロシアによる侵攻を受けております。オニシチェンコはウクライナ人ですが、音楽活動を活発にするため、両親はウクライナに残したまま自身はロシアに帰化しています。

私は、侵攻後に彼にメッセージを送りました。「無事になっているか？音楽活動はできているのか？今、君が何をどう思っているのか心配だ」と。今も返事はありません。それが彼の答えなのだと思います。オニシチェンコが今置かれている立場を思うと、本当に胸が痛みます。早く侵攻が終わって自由に音楽を奏でられる時が来たら、またオニシチェンコと岐阜でスラヴ音楽を奏でたい、私はそう強く願っています。

さて、今回の岐阜県交響楽団第100回記念定期演奏会のプログラムにもラフマニノフのピアノ協奏曲第3番が含まれています。この作品はラフマニノフ最大の難曲でもあり、スラヴ音楽の真髄であると言えるでしょう。

ピアノとオーケストラの一体化は、他のコンチェルト作品の群を抜いています。岐阜出身のピアノリスト

古田友哉さんは、確かなテクニックと共に、スラヴの心を奏でる抒情性や豊かな音色を兼ね備えた素晴らしいソリストであると思います。古田さんと岐響によるラフマニノフピアノ協奏曲第3番は、高揚感と幸福感に満ち溢れた演奏でお届けいたします。

次に演奏するベートーヴェンの劇音楽「エグモント序曲」は、16世紀スペインの圧政に苦しむオランダで、独立に身を捧げて処刑された英雄エグモントを描いた作品です。命をかけて侵略に立ち向かう不屈の精神には、ウクライナと重なるものを感じずにはいられません。クライマックスのエグモント斬首刑の後、沈黙、悲しみ、祈りを経て、湧き上がってくる勝利への讃歌を力強く演奏したいと思います。

そして、レスピーギの交響詩「ローマの祭り」は、第100回記念の演奏会に相応しい作品です。レスピーギのアイデア溢れる管弦楽法によって、バンタやマンドリン、オルガン、ピアノ連弾、打楽器群など豪華な大編成で「これぞ岐響の音！」とも言える重厚かつ激動の音楽となること

でしょう。

また、4つの異なる時代の祭りを表現した作品ですが、そこには人々の内なる声、祈り、想いが込められています。長い長い歴史と共に受け継がれてきた岐響の豊かな音楽性で、レスピーギの込めた想いを奏でます。

改めて、岐阜県交響楽団の皆様、第100回記念定期演奏会の開催誠におめでとうございます。

この様な大切な舞台に、私を客演

指揮者としてお迎えいただけることを心より嬉しく思っております。

また、ソリストの古田友哉さん、岐阜県交響楽団の皆様、この演奏会に関わってくださいました皆様、そしてご来場いただいた全てのお客様に深く感謝申し上げます。

初めて共演した時から、岐響の皆様とは多くの楽曲を様々な舞台で共に奏でてきました。築いてきた信頼や絆があるからこそ、岐響の皆様との音楽作りには一切の妥協をせず、

その時出来る最高のものを追い求める関係性があることはあります。憎悪ながら、私自身も「岐響ファミリーの一員」であると思っております。

これからの岐阜県交響楽団の皆様のご発展とご活躍を心からお祈り申し上げます。

そして本日の演奏会が、岐響にとってこれからの明るい未来を照らす光明となりますよう、精一杯指揮を務めさせていただきます。



▲岐阜練習場にてご指導中の高谷先生

# 一〇〇回の定期演奏会

当交響楽団は七十年前に発足、その後定期演奏会を重ね、今年一〇〇回に到達することができました。演奏会に足を運んでいただいている皆様、岐響理事役員・会員の皆様、諸先輩方、県市のご支援・ご厚情のおかげと深く感謝申し上げます。

第一回定期演奏会が行われたのは一九五七年一〇月一八日（岐阜市公会堂）でした。岐響が誕生してから四年後のことです。まだオーケストラの楽器がそろっていませんでした。不足する楽器をオルガンで代用していたと当時の記録には残されていますが、この演奏会の写真を見ますと、確かにステージ上にリードオルガンが並んでいます。偶然、そのお隣に懐かしいお顔を見つければ

た。長年岐響でコントラバスを弾いておられた山田孝氏です。なんと、ティンパニを叩いておられました。そういえば、私が入団した頃の山田氏よりこの演奏会のお話をお聞きしていたことを思い出しました。

## 第二回〜第一五回定期演奏会

（一九五八〜一九七三年）

年一回の定期演奏会。創設者の岐阜大学宮崎直一先生、本田しろぎ先生、学生やOBの山田孝氏、山田（村山）信広氏が指揮をされていました。私をはじめ岐響の演奏を聴いたのは、小学四年生のとき、一回目の岐阜国体が開催された年です。岐阜

商工会議所で開催された第九回定期演奏会だったようです。ちょうど岐阜市公会堂が建て替えの期間でした。第二二回の定期演奏会から岐阜市公会堂の跡地に建てられた岐阜市民会館がメインの会場となりました。特徴的な建物です。

## 第一六回〜

### 第二二回定期演奏会

（一九七四〜一九七七年）

この四年間は岐響の移行期と言えそうです。プロの指揮者をお招きするようになりました。定期演奏会は年二回、ファミリーコンサートもスタート。第一七回定期演奏会では初めて「第九」を演奏しました。岐響は社団法人となり、交響詩「長良川」を初演。一九七七年の第二二回定期



▲第1回定期演奏会のパンフレット表紙

演奏会には日本を代表する指揮者秋山和慶氏をお招きし、大曲のシヨスタコーピッチの交響曲第五番の演奏を行っています。岐響の拡大期に入り、この頃多くの団員が入団しました。私が入団したのもこの時期です。

### 第三回

#### 第四九回定期演奏会

(一九七八〜一九九四年)

この間にファミリーコンサートを含めて年三回の自主公演という現在のスケジュールが確立しました。

当時は組織としては法人化されていませんでしたが、演奏会の運営はまだまだ手作り感溢れるものでした。全員がどれかの演奏会の企画に参加し、指揮の先生と相談しながら曲目を含めて実施案をまとめていました。当日の受付や案内、ステージマネージャーも交代で行っていました。失敗もありましたが、みんなで助け合っ

第三〇回定期演奏会には小松一彦氏指揮によるチャイコフスキー交響曲第五番他でした。大変厳しくも的確な棒で、団員も必死にくらいついで挑みました。岐響ウィーン公演の際も指揮いただき、二〇一三年にご逝去されるまで岐響との関係は続きました。現在でも練習場にある合奏室入口にはお写真と氏の名言が掲示されています。

### 第五〇回

#### 一〇〇回定期演奏会

(一九九五年〜二〇二三年)

節目となる社団法人設立二〇周年記念・第五十回定期演奏会は名誉指揮者をお願いしている秋山和慶氏に登壇いただきました。一九七七年以来となります。たいへん緊張して演奏したことを覚えています。この演奏会から、定期演奏会の会場が長良川国際会議場となりました。

一九九八年に専用練習場完成、恵まれた環境を整えていただきました。一九九九年国民文化祭、同年羽島市文化センターでの定期演奏会スタート(第五八回)

二〇〇一年第六〇回定期(羽)

二〇〇三年に東京公演

二〇〇六年第七〇回定期(羽)

二〇〇九年ウィーン公演

二〇一二年第八十回定期(長)

二〇一八年第九〇回定期(羽)

当時の岡本理事長(現名誉理事長)

様はじめ各理事・役員の皆様のみならず、広く県民の皆様にバックアップいただいたおかげで、定期演奏会その他の大きな事業を継続することができました。心より御礼申し上げます。

次年度の第一〇一回演奏会は新たなスタートととらえ、より県民の皆様にあしこめていただけるオーケストラをめざします。

(事務局長 岡司義勝)



▲第1回定期演奏会の様子(岐阜市公会堂)

## 思い出と共に、

## 岐響定期

あの時の演奏会

ヴィオラ 小木曾 典孝

私が最初に岐響のステージに立ったのは第6回定期演奏会、昭和37(1962)年10月16日岐阜市公会堂(現・岐阜市民会館)でした。岐響が発足して9年後のことです。当時は宮崎直一先生が指揮をされていましたが、とても素晴らしい方で、先生との思い出は語りつくせないくらい沢山あります。

岐響の発足は戦後の復興が始まった間もない頃で、当時、弦楽器やフルート、金管楽器は何とか揃いましたが、オーボエやファゴットはなかなか奏者もおらず、アコーディオンやオルガンで代用していました。それでも岐響創設者である宮崎直一先生は岐阜県にオーケストラの響きを届けたい、その思いで活動を続け、演奏旅行として県内の学校をたくさん回りました。その後楽器もだんだん揃い、第5回定期演奏会のころには通常のオーケストラ楽器での演奏ができるようになってきました。

定期演奏会として印象に残っているのは、第10回定期演奏会。私が23歳のときで、岐響の団長(マネージャー)をしておりました。その演

奏会のソリストに当時京響(京都市交響楽団)に在籍されていた伊藤公一氏(フルート)をお迎えしました。伊藤さんは岐阜大学2年生(私は大学1年生)の時にプロとして京都に行かれました。1年生の演奏旅行のとき、伊藤さんの奏でられる音がありにも美しいので、生徒が身を乗り出して聴いていたことを思い出します。私が20年前、大垣商業高校に勤務していたときには、羽島と名古屋でのフルート演奏会を聴きに行きました。相変わらず美しい音でした。第10回定期演奏会で伊藤さんの音色と一緒に演奏してからもう61年にもなりますが、今でも演奏されている姿が思い出されます。伊藤さんは現在もフルート奏者として活躍です。



▶小木曾さんが初めて岐響の舞台上立った、第6回定期演奏会のパンフレット表紙

## 私の岐響定期あれこれ

クラリネット 上田久美子

岐響に入団して初めての第20回定

期演奏会、指揮者は朝比奈千足先生でした。

当時千足先生といえばクラリネット奏者のイメージしかなく、お父様の朝比奈隆先生指揮の大阪フィルでもーツァルトのクラリネットコンチェルトを聴いたばかりだったので、岐響の指揮台に立つていらっしやる千足先生を見て目が点になったことを覚えています。

その後、オーストラリアで長い間指揮活動をされ最近日本に帰られ、80才を過ぎた今もお元気でタクトを振られているとのこと。

第21回の秋山和慶先生、藤原真理さんのチェロや、小松一彦先生、小泉和裕先生、金洪才先生；そして100回の高谷光信先生まで様々な思い出があります。

第23回定期演奏会では宮沢明子さんがグリーグのピアノコンチェルトを弾かれました。北欧の自然や流れ落ちる雄大な滝のしぶきが感じられる素敵な演奏でした。

その1年後、私は名古屋のとあるホテルで結婚式を挙げました。お色直してエレベーターに乗っていたところ宮沢明子さんが一人の男性と入ってこれたあまりの偶然にびっくり！短い時間の中、私は岐響のことを話し、先生はベルギー人のご主人を紹介して下さい「お幸せにね！」と祝福の言葉をかけてくださいました。まるで映画か小説の中の出来事

のようでした。

実はその日花嫁である私は、土砂降りの雨で結婚式に遅刻をし皆に心配やら迷惑をかけ落ち込んでおりました。でもこの出来事で気分はいっぺんに最高潮にまで達しおたやかな気持ちで式を終えることができました。

そして岐響クラリネット族が忘れてはならないのが第63回定期演奏会のソリスト山本正治先生。古川合宿で長年指導を受けてきた私たちの岐響でクラリネットコンチェルトを”という夢がかなったコンサートを”でした。

豊かであたたかな音、客席の最後列まで届くピアノニッシモ、今思い出してもうっとりしてしまいます。私は、毎年夏に開かれる木曾音楽祭で山本先生のクラリネットを堪能しています。

また、コロナで練習が中止になった時の心の空洞、そして練習再開後初めて合奏した時の感動は忘れられません。身体に音をいっばいまとつたような感覚を覚え、思わず涙が出そうになりました。

オーケストラの真ん中で音楽を聴くこと、音に囲まれて演奏することがどんなに贅沢で素晴らしいかを実感しました。これからもずっと岐響が続いていきますように…。

## 岐響定期、未来に向けて

「第101回定期演奏会（次回を

迎えるにあたり）」

インスペクター 今岡 桂

この機関誌を読んで下さっている時間は開演前でしようか？休憩時間またはご自宅に戻られているかもしれませんね。今回演奏する曲目を聴かれたお客さまが幸せな気持ちになつて帰路について頂けると大変嬉しいです。

私がインスペクターを拝命してからの約2年間の岐響は、70周年記念、そして今回の第100回記念といった記念公演のために、大規模で複雑な難曲に挑戦して参りました。オーケストラにおけるインスペクターの役割とは、練習計画の立案やリハーサルの管理をし、団員と客演指揮者の間に入って、円滑に進めることです。

実際に100人近くいる団員は、様々な想いを持って演奏活動をしており、その全ての意向（流れ）を捉える事は、経験不足の私では力不足です。しかし、各楽器にはパトリアーダーが存在し、パート内の意見を取りまとめられます。そして楽

器の種類別に13あるパートそれぞれが、同じ方向を向いて進みながら合流し、大河となる事が出来たら幸いです。

さて、来年7月の第101回定期演奏会の曲目は、ベートーヴェンの交響曲第6番「田園」です！パンフレットにはこれまでの100回に渡る演奏会の記録が掲載されていますが、前回の演奏は1993年で実に30年振りとなります。宮沢賢治の「チエロ弾きのゴーシュ」など有名な名曲であるとともに、ベートーヴェンの楽曲はオーケストラにとつて演奏レベルを測るバロメーターであり、レベルアップに不可欠と云われています。

第101回定期は「原点回帰」の響きを想定しながら、基本に立ち返つて取り組んで参ります。そしてここから、長良川のような大きく豊かな大河となつて、ゆっくりと（時には激流も？）進んでいければと考えております。

クラシックがお好きな方から、少し敷居が高いと感じておられる方、若い方から年配の方にも楽しんで頂

ける演奏会をお届けします。ので、101回以降もぜひ足を運んで下さると幸甚に存じます。今後とも宜しくお願い申し上げます。

「これからの岐響の定期演奏会」

常務理事 木村 哲也

個人的な話で恐縮ですが、入団して初めて岐響で演奏したのが、第41回定期。それから病欠の一回を除き、約60回近い定期演奏会に出演してまいりました。マーラーやショスタコーヴィツチのようなハードな曲もあり、よくぞここまで唇がもつたもんだと我ながら感心もしています。途中からインスペクターという役職を拝命し、選曲にも多く関わらせてもらいました。そのときどきの指揮者の意向を確認しながら、プログラムが偏らないような様々な曲を提案してきました。お客様に喜んでいただける名曲の類から、プロオケのない岐阜では滅多に演奏されることのない佳曲を紹介する、ということも使命の一つと常に念頭に置き、選曲に携わってきたつもりです。

70周年を機にこの役割は次世代のメンバーが担うことになりました。今後の定期演奏会は、この方々の考え抜きでは語れないので、この文面作成を機に将来展望を尋ねてみるこ

とにしました。まず、大きな目標としては「新鮮さ」「挑戦」「好奇心」を満たす演目を考えていきたい、とのこと。同時に、我々自身も一生懸命に勉強し、弛まぬ向上心と情熱を持ち、岐響という固有名詞の音を持つオーケストラになっていくべき、という力強い言葉もいただけました。また、次世代の若い奏者の方が入団したくなるような魅力的なオーケストラ、定期演奏会を目指していくことも同時に考えていく必要がある、とも。我々はアマチュアオーケストラなので、音楽に真摯に向き合い、切磋琢磨しながらも、奏者自身が楽しく演奏できる環境・雰囲気づくりも不可欠な要因です。演奏技術だけでなく、一生懸命さや我々が楽しく演奏する姿が会場のお客様に届くと嬉しいですね。お客様に夢や力を与え、何かを揺り動かすような演奏を提供し、また次回の定期も聴きに行きたい！と思わせるような演奏会を目指していきたいです。

ここまでお読みいただいたお客様、まさか次回以降の演奏会にお越しいただけない…なんてことはないですよ？岐響は今後も岐阜県の芸術文化の普及と向上発展に寄与して参ります。是非、今後も岐阜県交響楽団の定期演奏会にご期待ください。

## 創立70周年記念公演(第99回定期演奏会) アンケートより

(令和5年8月11日 愛知県芸術劇場コンサートホール)

- 70周年記念演奏会、素晴らしい名演奏の数々、ありがとうございました。これだけの大曲に我が故郷の
- 岐阜交響楽団が挑まれ、鍛錬の証として渾身の名演奏を聞かせていただいたことに大変な喜びを感じ
- ました。マーラーの最終楽章では少し涙が出てきました。指揮者の井崎さん、ヴァイオリンの辻彩奈さ
- ん、ソプラノ林美予子さん、一流の才能と共に演奏された方々の力量も素晴らしかったです。

- 長良川花火の日にピッタリの曲目でした。夏の長良
- 川の清流の煌めきが目に浮かぶような歌声でした。
- 辻彩奈さんのバイオリンも、夢の中のような美しさで
- ふんわりと包み込まれるようでした。アンコールの愛
- の挨拶、大好きな曲を聴くことができ、大満足で
- す。マーラーの巨人もフルでオーケストラで聞くのは
- 初めてでした。いろいろなしなげもあり楽しんで聞く
- ことができました。

- 長良川は委嘱作品との事 流石に手慣れ
- ておられる感じで申し分ありません。コ
- ルンゴルトは知らない曲でしたが次々と
- メロディーが現れて楽しかったです。巨
- 人は録音ではよく聴いている大好きな
- 曲です。初めての生演奏で録音とは全く
- 違う美しさと魅力に気がつきました。あ
- りがとうございました。

- マーラーの熱き想いを 暑き日に
- 心躍らせ 深く聴き入る

